THE ULiCS TIMES

2024.4 vol.15

言わせて！ULiCSの推しポイント

春は新生活の季節。サークル選びに勤しむ新入生、そして、心機一転して新たなコミュニティとの出会いを求める学生に「神戸大学附属図書館学生チームULiCS」をおすすめします。

ULiCSは、神戸大学附属図書館公認の学生団体です。「ULiCS」とは「University Library Connects Students」の略称であり、図書館をより快適で魅力的な場所にすべく日々奔走しています。部員は11名（2023年時点）、アットホームな空気が特長です。

活動は総合・国際文化学図書館、自然科学系図書館をメインとするものの、各図書館やオンラインで行う時もあります。活動頻度は月に1～2回が目安です。月に一度行われるのが定例会と「まごまご読書倶楽部」です。いずれも部員のスケジュールを鑑みて日程調整が行われるため、予定との兼ね合いも考慮できてうれしいです。

いろいろなことができる！職員さんもメンバーも優しくてサポートも充実！（法学部4年）

初めて企画運営に挑戦した場所。職員さんの温かいサポートに支えられました！（国際人間科学部卒業生）

基本的に年に2度刊行する広報紙「THE ULiCS TIMES」（本紙）の作成も重要な活動です。今回は1つのコーナーに担当者を1人付け、記事やレイアウトを担いました。THE ULiCS TIMESは活動報告の場であり、大切な広報の場でもあります。図書館のカウンター等で見かけた際は、今後も気軽に手に取っていただきたいです。

ULiCSだけの本棚。自分の推した本が借りられているのを目にするとちょっと嬉しい。（国際人間科学部卒業生）

▲(写真)総合・国際文化学図書館には「ULiCS文庫」があります。手作りのポップに部員の個性が出て面白いです。（公式X）

2024年4月1日発行
神戸大学附属図書館学生チームULiCS

https://lib.kobe-u.ac.jp/about/ulics/

@ULiCS_KobeU_Lib

ULiCS 検索

ULiCSの活動はこれだけではありません。多くの部員が力を入れる活動、それは不定期開催の企画運営です。これまで行った企画は、展示企画「はじまりの一文」（2022年より毎年開催）、対面イベント「化石本発掘大作戦」（2023年）、クイズラリー「兵庫の旅」（2023年）等々。ジャンルも形態も多種多様であることがおわかりいただけると思います。

読書会や展示企画を通して、知らなかった本にたくさん出会える。自分の世界を大きく広げることができます！！（人文学研究科卒業生）

学年を超えた交流を楽しめるところ。学部1年生から院生まで、幅広いメンバーが活動しています！(国際文化学研究科M2)

頼もしくて優しい人たちばかりです。本や図書館を通じて様々な出会いが待っています！(人文学研究科M1)

今回は、部員からULiCSの「推しポイント」を特集しました。学年も専門も本の好みもまるで違う部員が集まって、ULiCSは今日もゆるゆると活動しています。和やかなコミュニティをお望みの学生は、ぜひ一度ご見学くださいね。

●HP　https://lib.kobe-u.ac.jp/about/ulics/　●X　@ULiCS_KobeU_Lib　●LINE　https://t.co/ZGBttFC2Di

BOOK REVIEWS

ULiCS部員が
おすすめ本を紹介！

テーマは、「自分の専門に興味を持ったきっかけとなった本」！
ULiCSには、学年も所属も異なる様々な部員が揃っています。そこで今回は、今の専攻や専門を選んだ、あるいは興味を持ったきっかけとなった一冊を、部員4名に紹介してもらいました！

土谷尚嗣『クオリアはどこから来るのか？統合情報理論のその先へ』
岩波書店(岩波科学ライブラリー)、2021年

あなたが見ている赤色は、私が見ている赤色と同じなのでしょうか。

よく考えてみると、赤色が“この色”に見えている必然性はどこにもありません。たとえ相手が“この色”を赤色と認識していたとしても、会話で齟齬が起きることはないでしょう。あなたと私で同じ色を同じように感じていると証明することは、実は非常に困難なのです。

クオリアとは、主観的な経験や感覚のことを指す用語です。クオリアは非常に身近な存在ですが、手掛かりをつかむことが難しく、その研究は科学界最大の難問とも言われています。

いやいや、赤色はさすがに“この色”で皆理解しているでしょう、と言いたくなる気持ちもわかります。ですが、人間の認知というのは非常に個人差があるものです。見る人によって青黒か白金か意見が分かれるドレス。右回転か左回転か意見が分かれる女性のシルエット。同じ器官を備えた人間なのだから、同じようにモノが見えていても良いはずなのに…。クオリアが醸し出すなんとも言えない魅惑から始まった私の認知心理学・心理物理学の学びは、人間の五感が持つ不思議さ・曖昧さ・そして面白さに迫るものでした。　（国際人間科学部卒業生）

バルザック『ゴリオ爺さん』（上・下）　高山鉄男訳、岩波文庫、1997年

私は大学・大学院を通してフランス文学を研究してきました。今回紹介する本は、学部時代のゼミで通読し、この分野の面白さに気づくきっかけになった本です。

『ゴリオ爺さん』は、19世紀を代表する文豪バルザックの傑作小説です。当時のパリを舞台にしたこの長編は、田舎から出てきた法学生ラスティニャックが、社交界での出世を目指して奮闘するさまを描いています。

作品では痛烈な社会諷刺が展開されています。ある貴族女性はラスティニャックに、社交界が欺瞞と虚構で溢れていることを教えます。学生アパートでは悪者の犯罪が露呈しても、周囲の人間は彼を善人だとみなして疑いません。現代にも通ずるような社会のあり方が描き出されているようで非常に興味深いです。

19世紀のフランスは激動期であり、数多くの名作が生まれた時期でもあります。当時の小説を読み解くことで、人間とは何か、社会とは何かを深く考えてみたい。そう思った私は他の作品も読むようになり、最終的にはエミール・ゾラに行き着きました。　（人文学研究科卒業生）

平田オリザ『演劇入門』　講談社現代新書、1998年

演劇を研究したいという漠然とした思いを抱えて芸術学研究室の戸を叩きました。

そんな私に後の指導教員が勧めてくれた劇作家こそ、紹介する本の著者である平田オリザです。彼は1990年代にそれまで流行していた派手で賑やかな演劇とは真逆の“現代口語演劇”を徹底した理論のもとで打ち出しました。この本はそんな平田が演劇を創る人に向けて作劇の技術を提供しています。それらは巧妙な観察と研究を経て創られた、複雑な計算式のようです。

平田を研究対象にするにあたってはじめに本書を手に取った私は、あくまで芸術のひとつであり感覚的な側面の強さを信じ込んでいた演劇に仕込まれた、平田流ロジックの難解さに触れました。

ここまでの作り込みようではどんな分析も平田の想定内のようにも感じられましたが、この完成度には隠された面白みがあるように思います。それに向き合う約３年間は大変充実していました。

（人文学研究科M1）

スタンレー・コレン『左ききは危険がいっぱい』　石山鈴子訳、文藝春秋、1994年

『左利きは早死にするから、右手に治しなさい』

左利きの皆さんの中には、親族や教師からこんなことを言われた経験を持つ人もいるでしょう。

例に漏れず、幼少のころから上記の定説を聞かされ続けていた左利きの私は、両親に左利きの無害さを説くべく地元の図書館で利き手に関する本を漁り、この一冊を手に取りました。

神経心理学の専門家である著者は、各国の根強い右利き信仰の歴史を紹介しつつ、脳研究の最新知見もふまえ利き手が健康と人格に及ぼす影響についてユーモアたっぷりに論じ上げています。

驚くべきことに、読めば読むほど、左利きのメリットなどござらんと主張せんばかりに、利き手と寿命に関する確たる証拠が複数揃っていることが分かりました。失望する中かろうじて持ち合わせていた、矯正すれば寿命は延びるのかという当時の淡い期待も、遺伝や出生時の負荷が永続的かつ強力な影響を脳に与えるという仮説によって打ち砕かれてはしまいましたが、脳の複雑さと後天的発達が人の一生を左右するというロマンが、その後の心理学や脳研究に対する私の興味関心を大いに高めたことは言うまでもありません。　（国際文化学研究科M2）

ULiCS BACKSTAGE!

企画の舞台裏

今年で３度目の開催を迎える企画「はじまりの一文」。その舞台裏を大公開！

1 はじまりの始まり

遡ること2021年、あるメンバーが共有してくれたのは、某公共図書館で催されていた、本を福袋形式で貸し出すという企画でした。袋には本を紹介するメッセージが添えられ、どんな本と出会えるのかという期待感に溢れているようでした。企画担当の脳裏には本の書き出しの一文目がひたすら並べられているウェブサイトが浮かびました。このふたつをうまくミックスできれば、面白い企画が生まれるのではないかーそんな構想です。そして春開催を視野に、本の一文目は本にとっての「はじめまして」であるという捉え方を思いついたのです。

そこからは企画書作成や展示エリアの想定など、イメージを形にしていく作業が続きました。もちろん2024年版でも企画書を作成しており、変更点は細かく図式化しました。欠かせないのは、“どれだけビジョンが明確か”なのではないでしょうか。ときにアドバイスをいただきながら、より見通しの立った状態で企画は始まっていきます。

思い付きで始めたような企画ですが、今や恒例にさせていただいています。より多くの人に楽しんでもらえることを目指して都度アップデートを実施しているので、今年も装い新たになっています。頑張ってます！（はじまりの一文企画担当）

2 “成長”する企画

「はじまりの一文」は過去にも２度開催歴のある企画です。このときは参加者が本を館内へ探しに行くという形態だったこともあり、本の配架場所を示す地図が不可欠でした。それにどの本が正解かを示すために、実際の本の背表紙にタグを貼り付けるという作業も行いました。もちろんやりがいもあったのですが、利用したい本が借りられている際は作業が中断してしまうこともありました。また、フィードバック収集のために2023年版では地図をデジタル化しました。これは初年度終了後に改良点として挙がっていたことのアップデートでしたが、目論見はうまくいきませんでした。このような試行錯誤も複数回開催している企画の醍醐味かもしれません。他方、毎度必ず行うのはSNSを通じた宣伝です。「はじまりの一文2024」でも開催直前には公式XやLINEで紹介する予定なので、それぞれ要チェックです！

どんな投稿であればULiCSに興味を持ってもらえるかな？と試行錯誤しながら、文面を考えたりSNS用ポスターを作成しています。活動が気になる方は、XやLINEも覗いてみて下さいね！

（ULiCS SNS担当）

今年のポスター

ロゴとポスターを担当しました。今年のテーマカラーは華やかなピンクです。図書館の落ち着いた雰囲気を壊さず、でもぱっと目を惹くビジュアル制作はやりがいがあります。

（はじまりの一文ビジュアル担当）

3 2024年版ここを見て！

2024年版は総合・国際文化学図書館２階にある棚での展示企画に移行しています。昨年度までの本を書架に探しに行くというイベント性やフィードバックの収集からは離れてしまいましたが、本と出会うというコンセプトは一貫して維持されているのではないでしょうか。新たな展示形態の「はじまりの一文2024」を楽しんでもらえると嬉しいです。また、「はじまりの一文」には魅力的な書き出しが欠かせません。毎回メンバーに募らせてもらっており、今年度も多種多様な本が集まっています。ULiCSに読書経験豊富でそれぞれ趣味の異なるメンバーが集まっていることのおかげです。形態や使用する一文以外にも、ロゴやポスターなどのビジュアル制作でもアップデートを実施しています。センスあふれる頼もしい仲間が力を貸してくれており、2024年度もロゴはカラーのアップデートを行い、そしてポスターは刷新しました。「はじまりの一文2024」は３月25日から総合・国際文化学図書館２階の展示コーナーで開催中！ぜひ見に来てください！

今年のロゴ